

在日韓国人3世のアイデンティティ形成に関する ナラティブ研究

—女子大学生二人の事例を中心に—

Narrative research on the identity formation of third generation Korean-Japanese

—Focusing on cases of two girls' college students—

梁 正 善

Jeongseon YANG

I 序論

本研究では、日本で生まれ育った韓国にルーツを持つ在日3世のアイデンティティ形成と主題とし、彼女らのアイデンティティ形成に関わることについてインタビューをした。さらに、彼女らのアイデンティティ形成を裏付ける HTP という絵の検査も行ったことである。

Erikson は、アイデンティティを人間周期（ライフサイクル）に基づいていた心理・社会的発達として捉えている。アイデンティティの中心概念は自我アイデンティティであり、言語・文化的アイデンティティはアイデンティティを考察する上での一要素、一つの側面である。それに関して箕浦（1994）は、異文化の中で人格形成した人の文化的アイデンティティを「自分とは何者であるかについて自分自身が抱いているイメージ・信念・感情・評価などの総体である」とし、それをセルフ・アイデンティティの一側面として捉え、「特に、個人がその中で生きている社会・文化システムと自分をどのような関係において捉えるかを示す自己意識」と定義している（趙衛国 2007：338より再引用）。

文化的アイデンティティとは、自分がある文化に所属しているという感覚（文化的帰属感）、あるいは意識（部下的帰属意識）である（鈴木 2008）。大西晶子（2001）は、民族的アイデンティティ、文化的アイデンティティ、国民アイデンティティなどを、個人がある文化的集団の一員として形成する自己概念、所属感と捉え、これらすべてを総括するものとして「文化的アイデンティティ」の定義を行っている。

鄭（2006）は在日韓国人148名を対象に言語使用とアイデンティティの関係を調査した。韓国語の能力が高いほど韓国人としてのアイデンティティが強く表れ、若い世代こそ韓国語の使用率が低く、韓国人としてのアイデンティティも薄れて行くものと述べていた。

李・田中（2010）は在日韓国人11名（2世3名、3世8名）を対象に、二文化環境への態度について探索する研究を行った。年齢は20代から60代と幅広いが、対象者に「自分の文化的アイデンティティの状況を一言で言ったら」と尋ね、「統合人・日本人・韓国人・自由人」を提示し選んでもらう方法で調査した結果、「韓国人」を選んだ人が2名、「日本人と韓国人の両方」を選んだ人が4名、無回答が1名、いずれの分類にも当てはまらないという答え方をし、脱文化的な先駆をした人が4名いたことを明らかにしてい

る。

梁 (2010) は民族学級卒業生へのインタビューを行った。その考察では民族学級との出会いを通じて、今までに全く学んだことのない異文化に近い民族学習を、最終的には親しい自己の文化として肯定的に受容できるようになることや、多数の同じ在日コリアンの子どもたちが民族学級に結集することが対象者の内面に安心感をもたらしていた可能性について言及している。

曹 (2012) は、インタビュー調査の検討から民族学校が日本各地に存在し、朝鮮学校在学経験者のネットワークを内実とする独自のコミュニティの結節点として機能することを指摘している。また、曹 (2013) は、日本人学校に在学する在日コリアン青年と民族学校に在学する在日コリアン青年へのインタビュー調査を行い、得られた語りの比較検討から、民族学校に在学する在日コリアン学生の場合、家族や親族以外の在日コリアンとの関係性が濃密な環境で生育し、学校では学生同士だけでなく教員を含めて、親密な関係を築いており、エスニック・アイデンティティの形成に深刻な心理的葛藤を抱えることが少ないことを指摘している。

本稿では、韓国にルーツを持つ在日韓国人3世のアイデンティティ形成について考察することと目的としそれに伴いインタビュー調査で明らかになったことを更に究明するために心理査定的一种である描画テスト HTP (House-Tree-Person) を用いることにした。HTP 検査は実施が簡単で、言葉では表現できない、または話したくない心の世界が投影されやすいことから心理査定として敵しているとされる。HTP 検査という絵の検査を実施し彼女らのアイデンティティに関することをより深く考察することにする。

II 研究方法

1. ナラティブ (narrative) 事例研究

本研究は、在日韓国人3世のアイデンティティ形成に関する認識を理解するためのナラティブ方法を活用した質的事例研究である。この研究方法は特定の集団の行動スタイル、価値、態度に関する一般的な傾向性ではなく研究対象の個別な特性とフォーカスを当てているので研究結果には普遍性を想定しない (이민경・김경근, 2009)。ナラティブ研究 (narrative inquiry) は、心理学、教育学、社会学、医療・看護学などさまざまな人文・社会諸科学の研究領域における質的研究法としてますます注目を集めている。口述されたもの (語られたもの)、書かれたもの、ヴィジュアルに表現されたものと、形式を問わずナラティブへの関心は高まっており、1920年代から1930年代のシカゴ学派によるライフ・ストーリー研究以来、近年では「ナラティブ・ターン (物語的転回)」といわれ、大きなうねりを創っている (Denzin & Lincoln, 2000/2006; Polkinghorne, 1995; Riessman, 2008; やまだ, 2006)。なかでも心理学においては、行動主義心理学から認知主義心理学への転換に続く、第二の認知革命としてブルーナー (1986, 1990, 2002) が物語りにおける意味生成のプロセスに着目した研究を展開していることの影響が大きいといえよう。

Ochs & Capps (1996) は、ナラティブは人間が経験したことが意味深くする重要な方法であると言った。また、ナラティブと自我はかけ離れられない関係を持っている。ナラティブは人間の実験経験を意識的に気付かせてくれる不可欠な手段と主張した。すなわち、人間の経験を、ナラティブを通して描写することは単純に個人の過去の事実を述べることのみならず、社会の一員としての他人との関係を通して彼らがどういうふうに自分の自我アイデンティティを形成してきたか、その過程を理解する大事な探求方法になるだろう (金ザヨン 2017: p131再引用)。

Bakhtin (1981) は、言語を生きている社会のイデオロギーの具体的な実在であり、多様な意見の総体であるとした。換言すれば、言語は話者の考え、感情や価値を伝える社会的なものであり、対話的なものである決まった言語的意思疎通の道具である。さらに Bakhtin (1981) は、自我は「自分を見つめ直す意識」と「他人が私を見つめ直す意識」が対話主義関係を通して総体的意味を持つ健全な自分の姿が形成される

と主張した。ナラティブ観点は Bakhtin (1981) が主張した対話主義と一脈相通ずる。

本研究で非構造化されたインタビュー (semi-structured interview)¹⁾ であるという特性も踏まえ、面接時間は一人約1時間から1時間半である。また、研究対象者の承諾を得て録音し、分析の際にはそれをすべて文字化した。研究目的に従い在日3世のアイデンティティ形成に関わる生育歴や生育環境、学校生活、友人関係、家庭環境や家族、言葉、文化、韓国・韓国人と日本・日本人の相違点等、将来についてインタビューを行う方法をとった。これらのインタビューの内容を分析した。分析を通して、彼女らのアイデンティティ形成に関わることを分析した。個人情報保護のために、研究対象者はA、Bと使うこととする。

2. 研究対象者

①研究対象者：研究に参加したAさん(21歳、女)は、祖母(母方)が韓国人で、母親は韓国人二世である在日韓国人の三世、大学生である。日本の地方都市に在住し、私立大学に在籍している。大学の寮に住んでおり、親は熊本に住んでいる。

Bさんは祖母(母方)が韓国人で、母親が韓国人二世である在日韓国人三世で、大学生である。日本の地方都市に在住し、私立大学に在籍している。大学の寮で住んでいる。親は福岡に住んでいる。事例の提示に関しては、匿名性保持のためAとBに設定している。

②調査期日・場所：面接期間は2018年5月初め～2018年5月末。面接は3回の面接調査とSNS等を利用して面接調査を行った。場所は研究対象者が在学している大学の講義室。

③調査方法：文化的アイデンティティ形成との関連で、在日三世ということをもどのように受け止め、感じているかを中心にインタビューを進めて行く(必要に応じて、悩みの相談等にも応じる)。インタビューの内容は、生育歴や生育環境、学校生活、友人関係、家庭環境や家族、言葉、文化、韓国・韓国人と日本・日本人の相違点等についてである。インタビュー時の使用言語は、日本語および韓国語。録画と携帯の録音機能を使う。また、インタビュー時以外に得られた資料(SNSでのメール)も参考にする。

「表1」 事例Aと事例Bの属性比較

事例	A	B
組み合わせ	日本・韓国	日本・韓国
韓国人の祖母	祖父(92歳、去年死亡)：日本 祖母(90歳)：韓国(日本生まれで中学校までは済州道で過ごす)	祖父(69歳)：日本 祖母(68歳)：韓国(慶州出身)
日本人の父親	父(58歳)：日本人(熊本出身) 母(53歳)：在日韓国人2世(福岡出身) 父と母はお見合い結婚	父(50)：日本人(福岡出身) 母(44)：在日韓国人2世(福岡生出身) 父と母は恋愛結婚
出生地	熊本	福岡
居住地	日本の地方都市	日本の地方都市
家庭	3人家族、一人っ子 上流 父：歯医者 母：システムエンジニアでありながら病院の事務	3人家族、一人っ子 中流 父：会社員 母：保育士(20年間)、現在は幼稚園の教師 ※祖母(母方)と祖父と三世帯で暮らす
学校	日本の小中高校→日本の私立大学	日本の小中(公立)高(私立)→日本の私立大学
年齢	21歳	21歳
性別	女子	女子
国籍	日本	日本
韓国への渡航の回数	月に1回	年に2回

1) あらかじめ準備した質問項目に従って質問が行われるが、対話の流れに合わせて質問順番を変えたり、質問事項を追加したりすることができるインタビューのことである。これにより、柔軟に回答者から意見を聞き取ることが可能になる。

④研究結果の整理・分析：各回ごとに、録音と筆記したものを基に基礎資料を作成する。次に、内容をカテゴリーごと（例：生育環境）に整理し、言語・文化習得を中心に、ナラティブ研究を行う。

Ⅲ 研究結果

「生育歴と生育環境の概略」、「家庭、学校、言語などの現在（インタビュー時）の状況」、「韓国・韓国人と日本・日本人について感じていること」、「在日3世としての意識」、「将来について（将来への計画）」に分類し、事例ごとにインタビュー結果を提示することとともに、若干の考察を加える。なお、研究対象者の語りは『』、インタビュー者の発話は（Y:）で示す。

(1) Aさんの事例

- ・日本生まれの日本国籍で21歳（女）。大学3年生（英語学科）。祖父は日本国籍（92歳で死亡）、祖母は日本国籍であるが韓国人である（92歳）、父親は日本国籍（58歳）で歯医者、母は日本国籍（53歳）システムエンジニア兼医療事務、英語が堪能。韓国語は中級レベルで、一人っ子。
- ・2018年5月初～2018年5月末までの間に週3回インタビューを実施。各回1時間から3時間。主に日本語、一部は韓国語を使用。インタビューの場所は講義室。

「生育歴および生育環境の概略」

日本で生まれ日本育ち。19歳までは日本人であると思っていた。19歳になり、祖母（母方）が韓国人であることを明かされた。それまでは明かしていない。理由としては、親戚が韓国の血がつながっていることでいじめられ、親の方針で高校までは普通の日本人のように育てられる。祖母（母方）が韓国人であると知られたときには驚いたし、もっと早く教えてもらいたかった。

母は元システムエンジニアで、今は病院の受付をしながらたまにシステムエンジニアの仕事に携わる。母方の父（陸軍士官学校出身で自衛隊）がアメリカに3年間派遣され、中国の満州にも滞在していた背景をもち、英語や中国が堪能で、韓国語も話していた。祖父の影響で、母は語学に堪能で英語がネイティブ並み。英語が堪能で留学は行ってないけど、Aさんを授かる前から英会話教室に通っていてネイティブの先生達と週一回交流会（パーティー）を夜中2時まで開いていた。家が3階建てで1階ではパーティーを開き、3階では英語ができるネイティブの子供や国際結婚家庭の子供が集まり、絵本を読んだりゲームをしたり子供達も交流会を深めていた。料理のレシピも英語で、英語圏の食べ物にも小さい時から触れた。周りにはカナダ人、イギリス人、アメリカ人、メキシコ人、オーストラリア人などがいて、常に異文化に触れていた。母が英会話教室に通っていて、生まれてすぐAさんも通うことになる。二歳にバイオリンをアメリカ夫婦に勧められ英語でバイオリンレッスンはじめた。家には英語圏の絵本やDVD、CD-ROMなどがあり常に外国文化に触れていた。母の教育方針により、家ではすべて英語で喋られるように進められた。バイオリンレッスン時の写真や運動会の時に応援に駆けつけてくれた外国人夫妻の夫婦との写真を見せてもらった。フランス人の画家さんと母が友達になり、フランス語も教えてもらった。小中高校まで公立に通い、高校受験で東京にある芸術大学付属の高校に受かったけれど、地元で通うことを決意した。中学生まではバイオリニストになりなかった。中国人のバイオリニストと英語でレッスンもしていた。ベルリン・フィルのバイオリニストや知名度の高いバイオリニストにもレッスンをしてもらった。バイオリンで賞を取ったりすることで周りからの期待が多く、周りに強要されるのが嫌でやめた。自分のためではなかったので、英語もバイオリンもやめた。

高校生の時、韓国から校長先生と韓国の学生（韓国全国各地から）が訪れ、交流会を英語で始めることになる。当初、韓国に興味もなかったけれど、英語で話しているうちにK-POPを一緒に聞いて仲良くなり、未だに連絡を取り合っている。

「現在の状況」(インタビュー)

家庭環境：Aさんが地元から離れ、ある地方都市の私立大学に通っているため、月に2～3ほど里帰りをしている。家では日本語を使っている。福岡にいるおばあさんに会いに月に1回は訪れている。里帰りする度にK-POPを流すことで父からはAが帰ってくると家中が韓国になるのだと言われている。

学校環境：Aさんは英語学科の大学生である。最初は慣れなくてどうしようとしていたが、やりたいことが見つかったので通い続けている(今の大学を志願したわけではない。最初は歯学部を受験したけれど、落ちて今の大学に入学することになった。最初は大学に慣れなくて大変だったけど大好きな韓国語や英語も学べるということで大学を通い続けている)。

一年生の時に韓国の大学の2週間の短期プログラムを利用し韓国文化を体験したこともあり、韓国語がますます好きになり毎日K-POPを聞いている。聞きながら分からない単語や発音等を自習的に調べている。さらに、寮に韓国人留学生がいるので音楽を通して会話を進めている。TOPIKの試験を受けて資格を取るつもりである。

言語環境：在日2世の母は韓国語をまったく話せない。Aさんが韓国語を勉強し始めてから興味を持ち出したけど、韓国語の勉強はしていない。英語は堪能である。父も英語は話せる。日本語と英語ができる。韓国語は中級レベルで、日常生活では日本語を主に使っている。韓国語は週一回の韓国語の授業があり、語学のみならず文化にも触れている。韓国語を学んで韓国人と会話が可能になった。出来れば韓国語を使って韓国で働き、韓国に住んでみたい。

「Y：韓国語を学ぶ理由は？」

「A：おばあさんが韓国人であり19歳まで自分はそれを知らずに育てられ、おばあさんとの距離を縮めるために習おうとした。また、高校生時に日韓交流会を通して親しくなった韓国人の友達と会話を深めるために学んでいる。韓流ブームで自分が好きなK-POPのアイドルが歌っている歌詞も理解したいし、字幕なしで韓国のドラマもみたいから学んでいる。韓国語を通して祖母(祖母は今アルツハイマー病が酷くてAさんのことを忘れていて)と話がしたかった。」

「Y：韓国語を学び変わったことは？」

「A：韓国人の会話が可能になった。高校生の時に日韓交流会を通して知り合った友人との会話が楽しくなった。韓国語を学びTOPIK(韓国語能力検定試験)を今年10月に受ける予定である。資格を取り、就職活動に繋ぎたい。韓国のK-POPを毎日聞いていて分からない単語や発音等は自習的に調べて勉強するようになった。」

考察：在日2世の母親は日本語と英語を話せる。家庭では、日本語のみである。学校では韓国語の授業もあり、韓国人の留学生とも韓国語を話している。また、SNSを通して韓国にいる友達とコミュニケーションを取っている。

「韓国・韓国人と日本・日本人」

韓国人の元彼氏がいた時には週一回韓国に行っていた。日頃、SNS、YOUTUBE、K-POP、韓国ドラマを通して韓国の現代文化に影響を受けている。

「Y：韓国に対するイメージは？」

「A：韓流ブームもあり韓国に対しては憧れのイメージが強い。」『メディアが韓国に対する嫌悪感をもたらす報道することにより日韓感情も強まるし高まると思う。メディアがマイナスイメージをもたらす報道のやり方で日韓感情は段々悪くなる方向へと扇動していく。』

「Y：韓国人に対するイメージは？」

「19歳以前はあんまり韓国・韓国人について興味もなく関心もなかった。しかし、高校生の時日韓交流会を通してK-POPで韓国人の友達と仲良くなり、興味を持ち始めた。また、19歳になり祖母(母方)が韓国人であることで、祖母との関係を縮めるためにも韓国・韓国人に興味と関心を持つようになった。韓国人

の友達の紹介により、彼氏を紹介してもらって付き合い合ったこともあり、韓国人に対しては優しいイメージと喜怒哀楽が激しいイメージがある（韓国ドラマから見える韓国人イメージ）。韓国・韓国人に憧れがあり、日本を逸脱したい。』

考察：日本育ちの在日3世であるが、19歳までは韓国・韓国人とは無縁で、19歳以降祖母が韓国人であることを知らされ、自分のルーツを探するために韓国・韓国語を学ぶきっかけにもなり、高校生の時に聞いていたK-POP等や韓流ブームで拍車がかかった。メディアの発達により、YOUTUBE、SNS、K-POP、韓国ドラマ等で今は一日中ずっと韓国文化に触れている。Aが韓国人の血がつながっていることで誇りを思うと同時に、自分のルーツを知るために韓国文化に触れていることがわかる。

『在日3世としての意識の芽生え（文化的アイデンティティ意識の芽生え）』

『Y：国籍はどこですか？』

『A：自分は形式上日本人で国籍も日本であるけれど、中身は韓国人である。19歳以降からは自分は周りの人と違うことを認識し始めた。外見上日本人に見えるが内面は外国人の韓国人である。出来れば韓国人になりたい。韓国で仕事をしたい』

『Y：もっと早い段階で祖母が韓国人であることを知らされたらAさんの人生にどう影響があっただろうか？』

『A：学べる言語と文化が2つになるから、日本と韓国の文化の相違点も学べたかもしれない。今はとにかく韓国に対するイメージが肯定的で、憧れもあるのでできるなら韓国人になりたい反面、韓国人のルーツを持つことで中高生の時にイジメに会った可能性もあったかもしれない。また、悪口も言われたかもしれない。』

『Y：日本社会に求める変化は？』

『A：もっと隣国の韓国について紹介したり（今は悪い面しか報道されていない）、いい面を含めてTVに流してほしい。音楽性と芸術性を含めた現代文化と伝統文化を身近に知ることができるよう番組を編成して、韓国の文化に触れることが出来るようにしてほしい。看板とか英語、中国語、韓国語の表記等は見かけるけれど、路面電車や路線バスの案内放送も各国の言葉で案内してほしい（高速バス、JR、新幹線は多国語案内放送がある）。駅の乗務員やホテルのスタッフも英語のみならず、アジアの言語である韓国語や中国語の言語を話してほしい。大学では、夏休みの集中講座（通訳講座を履修することで単位を取得できるように、午前グループと午後グループに分けて）で「観光＋言語」を同時に取り入れ、県・市と協力して隣の国についてもっと学ぶきっかけを作る。また、街中（観光スポット）に言語ボランティア学生（一般人を含む）を配置してほしい。大学と連携し、学生の専攻である英語、韓国語、中国語、フランス語、スペイン語を使い実践会話が出来るように派遣する。』

『国はもっと小さい時からアジア圏（韓国、中国）の子供と文化交流が出来るようにきっかけをつくる。そうすることで偏見をなくしたり、多様性を認めるようになる。』

『自分の経験から見れば、生まれて間もない頃から母が通う英会話教室に通うことになり英語に触れた。自然に英語圏（アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ）を含め中国、フランスの文化に触れることになった。外国人夫婦と英語を通して音楽や料理等も学ぶことも出来た。また、外国人夫婦には実の子はいなく黒人の子供を養子として受け入れ、大事に育てていることを、いろいろな人の生き方をみて学んだ。』

考察：19歳以降に韓国のルーツであることを知らされたAは、外見上日本人であり国籍も日本であるけれど、周りとは違って中身は外国人であり韓国人であることを誇りに思っている。日本社会に求める変化等を聞いてみてわかるように、韓国・韓国人について正しい報道をしてほしいことと県、市、大学が連携して韓国文化と言語を学び、それを観光に来て韓国人に活かすべきであることを主張している。ここではAさんの文化的アイデンティティ意識を示唆している。また、幼い時期から多国籍の人との交流を通してオープンなマインドになり、誰にでも友達になれるという明るい性格になっている。

「将来について」

「Y：韓国語を学んで留学に行きたいのか？」

「A：行きたいけれど、親が反対している。4年で大学は卒業してほしい。留学中事故とかに巻き込まれる可能性もあるので、留学は大学を卒業してから自分で稼いで行ってほしいと言われたので留学は大学を卒業してから行こうと思っている。」

「Y：国際結婚についてどう思うのか？」

「A：私の国際結婚の家庭に生まれてほしかった。言語も文化も2つ学べる環境であるので一石二鳥であると思う。元彼氏が韓国人であった経緯もあり、日韓国際結婚願望は強い。また、友達の中でも日韓国際カップルや日韓国際結婚をしている人がいるので自分もその仲間に入りたい。日本人と結婚したら普通の平凡な生活になりそうで、憧れの国の人と結婚したい。」

「Y：国際結婚したら韓国で住みたいのか？」

「A：住むのは日本で住む、経済的に日本が潤っているので稼ぐのは日本で稼いで旅行は韓国でしたい。」

「Y：国際結婚をしたら子供の教育はどうしたいのか？」

「A：私は日本語を夫には韓国語を教えてもらいたい。また、英語は大事であり、世界共通語でもあるので英語も教えたい。また、日韓国際結婚をしている人とのコミュニティーも大事なので、センター等があれば利用したい。以前、〇〇町で韓国人とのコミュニティーコリアンカフェを利用したことがあるが、ある公民館をお借りしてご飯とコーヒーを振る舞ってくれていた。そこでミニ文化体験をしたこともありセンター等があれば、言語と文化交流を深めたい。」

「Y：もし、自分と同じ立場にいる日韓国際結婚家庭の子供達がいたらどう関わりたいのか？」

「A：できれば、子供達とのコミュニケーションを図りながらいろんな遊びや旅行等を通して、文化的アイデンティティ形成に役立つようにしたい。子供達と触れ合うことはとても大事で、居場所が大事である。」

「事例Aのインタビューのまとめ」

日本生まれで日本国籍。祖母（母方）が韓国人で、自分が韓国にルーツを持つ子供であることを19歳に知らされる。祖母が韓国人であることで、19歳以前までは韓国・韓国人との関わりもなかったけれど、本人はもっと早く教えてもらいたかったようだ。ずっと日本人だと思い込み、韓国についてもさほど関心がなかった。しかし、高校生の日韓交流会がきっかけで韓国人の友達とK-POPを通して仲良くなり、SNSで情報交換するうちに少し韓国に興味を持つようになる。19歳以降祖母が韓国人であることで祖母と韓国語でコミュニケーションをしたい、祖母ともっといろいろなお話しがしたかったということからわかるように、自分のルーツである韓国・韓国人であるをもっと知るために努力している。19歳以降から自分は国籍と外面上は日本・日本人であるけれど、内面は韓国人であると認識し始める。大学生になり、大学の夏短期プログラムで2週間韓国の文化に触れたり、大学で韓国語を受講したり、K-POPや韓国ドラマ鑑賞、元彼氏が韓国人であったり、週一回韓国を訪問したりなど、すべてが韓国のルーツと関係があり、文化的アイデンティティを探るプロセスにあたる。将来について国際結婚について質問したところ形式上日本人であると言ったAは自分が韓国にルーツを持つ在日3世であることを意識したのか平凡な暮らしより日韓国際結婚を通して自分のアイデンティティを探ることを求めているように見える。

(2) 「Bさんのインタビュー事例」

- ・日本生まれの日本国籍。祖父（69歳）は日本国籍で、祖母は日本国籍？（68歳、韓国人、日本語が堪能）、父親は日本国籍（50歳）、会社員、日本語のみ可能。母親は日本国籍（44歳）で会社員、日本語のみ可能（韓国語は5年前から韓国語教室に通い始めたけれど今はやめている）。一人っ子で、私立大学英語学科3年生（21歳・女）。
- ・2018年5月初～2018年5月末までの間に週3回インタビューを実施。各回1時間から3時間。主に日本

語、一部は韓国語を使用。インタビュー場所は講義室。

「生育歴および生育環境の概略」

日本に生まれ、ずっと日本で育てられる。2歳頃から今まで年に1～2回韓国（主にソウルと釜山）を旅行しながら、韓国の親戚との交流もあった。韓国の伝統衣装も着用し、韓国で家族と撮影した。韓国は親近感が湧く。祖母と同居している（Bが高1～高2までは祖母と別居）祖母が衛星テレビで韓国のドラマを観ていて、Bさんも傍でよく観ていた。韓国の食文化にも触れていた。家庭内で韓国のお雑煮（떡국）、蔘鶏湯（삼계탕）、トッポギ（떡볶이）、キムチ（김치）、お餅（떡）をよく作ってくれた。祖母は喜怒哀楽の感情が豊かで韓国語の叫び声である「アイゴ～」をいつも発していた。祖母は日本語が堪能だが、いつも韓国語でお話ししてくれた。祖母曰く「Bが大学生になって韓国語を学んでいるけれど、幼い時からハングルを教えておけばよかった」と少し悔やんで話していたという。

「Y：幼い時の環境では祖母が韓国人であることで青少年期のアイデンティティ形成には影響はあったのか？」

「B：おとこはお父さんが韓国人、お母さん（Bさんの母親の妹）は祖母が韓国人であることでイジメにもあってないし、自分も韓国のルーツを持つことによりアイデンティティ形成にはマイナス的な影響はなかった。小中校は公立、高校は私立に通っていた。割りと友人関係も円満であった。

考察：Bは日本生まれで、幼い時から祖母の影響で常に韓国の文化に触れていた。周りの親戚（いとこの家族）も父親が韓国人であり、韓国・韓国人には常に接触があった。年に2回定期的に韓国を訪れ韓国の文化に触れていた。しかし、家では韓国語を使う機会もなく、教えてもらってもないが、韓国の文化には幼い時からずっと触れていて、Bの内面は韓国人であると言っている。

「現在の状況」（インタビュー）

家庭：祖母と同居している。高校1年生から高校2年生までは祖母と別居していたが、その後また祖母と同居するようになった。別居している時は生活パターン等を見直すために別居していたという。家では日本語を使っているけれど、韓国の文化（韓国のドラマ、食文化）には常に触れている。Bがある地方都市の私立大学に通っているため、里帰りは月1回になっている。小さい時から韓国の文化が当たり前のことであって、大学生になった今も家に韓国の文化要素があるのは当たり前である。母親は5年前から韓国語教室に通い始めていたけれど、いつの間にかやめていた。

言語環境：祖母は日本語が堪能で、家では韓国語ではなく日本語を話していた。小中高校までは日本語のみを使っていたが、大学生になり、週一回韓国語の授業を受けることにより、韓国語を読めるようになった。少し会話も出来るようになった。しかし、韓国語の難しさを感じ、韓国語IIは受講していない。毎日韓国語に触れている。K-POP、韓国のドラマ、YOUTUBE等を観ていて、韓国語に触れている（おそらく、中身は韓国人であるという意識なのかもしれないが、韓国の文化には触れていてつながっている）。Bの母親は5年前から韓国語教室に通い始めていたが、いつの間にかやめていた（やめた理由については詳細に聞いていない）。

「Y：韓国語を学ぼうとした理由は？」

「B：幼い時から祖母がよく韓国のドラマを観ていたこともあって祖母と一緒にドラマを観ながら字幕なしでドラマの内容を理解できればと思って履修した。大学生になり、韓国語を履修することになり、韓国に近づけたようで嬉しく思う。韓国にルーツを持つ子供として、祖母の国の言語を習うことが嬉しく思う。また、韓流ブームであり憧れの韓国に近づけたようで嬉しい。すなわち、日本で韓流ブームになりプラスイメージをもたらした韓国の言語を学ぶことにより誇りに思う。」

大学生活：自分なりに楽しんでいる。

友人関係：割りと明るい性格で、韓国語の授業を受けている時には他の友達と一緒にわからない部分については教え合う場面もあった。

考察：小中高校生までは韓国語を自ら学ぼうとも、祖母から教えてもらったこともなかったが、大学生になり韓国にルーツを持つことで、韓国語を学ぶことにつながった。韓国語を学ぶことにより祖母の国に近づけたことと韓流ブームになり、肯定的なイメージをもたらしている韓国の言語を学ぶことにより誇りを思っている。

「韓国・韓国人と日本・日本人」

「Y：韓国に対するイメージは？」

「B：マイナスイメージはない。韓流ブームになりプラスイメージの韓国の言語を学ぶことになり嬉しく思っている。」

「Y：韓国人に対するイメージは？」

「B：韓国のドラマから観ていて優しいイメージがある同時に、よく怒るシーン等があるということと、祖母が疲れた時によく口にしていた「アイゴ〜」等を聞いていて、感情に正直な民族だというイメージがあり、喜怒哀楽が激しいイメージがある。」

考察：韓国・韓国人に対するイメージは肯定的なイメージが強い。祖母が韓国人で親近感が湧く。

「在日3世としての意識の芽生え（文化的アイデンティティ意識の芽生え）」

「Y：国籍はどこですか」

「B：国籍は日本で形式上日本人である。内面は韓国人だと思う。定期的に2歳から年に2回、家族で韓国を旅行していて韓国は親近感が湧く。」

「Y：幼い時から韓国に触れていたが、自分のアイデンティティ形成にどう影響を与えていたのか？」

「B：周りの親戚（いとこの家族が、父親が韓国人で母親はBの母親の妹）が韓国の文化を持つ人と、韓国のルーツを持つ人がいたので、日韓文化が飛び交うのは当たり前であった。青少年期には自分は何者かというアイデンティティについては悩んだことがない。」

「Y：おそらく、経済的な困難もなく中流社会に生きているからイジメやアイデンティティ形成についてもあんまり揺れがなかったということですか？」

「B：そうですね。いとこが小学生ですが、父親が韓国人であることでイジメに遭ったことはなく、敢えて周りから国際児であることで羨ましがられている。私のイジメにも遭っていません。韓国のルーツを持つことで自分のアイデンティティに悩んだことはないですね。」

「Y：日本社会に求める変化は？」

「B：病院も英語のみならずアジア言語の韓国語、中国語等が話せるスタッフを配置してほしい。駅の乗務員やホテルのスタッフも英語のみならずアジア言語である韓国語、中国語を話してほしい。路面電車、路面バスにも多言語のアナウンスを流してほしい。そうすることにより観光客も安心して観光できると思う。」

考察：幼い時から韓国の生活文化に触れていて、Bにとっては2つの文化が存在する極当たり前の生活が続いていた。また、韓国にルーツをもついとこの存在も大きいと言える。安定的に生活を送ってきたことも、Bのアイデンティティ形成に礎を作ったことにつながっている。

「将来について」

「Y：韓国語を学んで留学に行きたいのか？」

「B：行きたいけど、4年で卒業出来るか心配なので迷っているけど行きたい。」

「Y：韓国に住んでみたいのか？」

「B：住んでみたい！憧れの国で自分の血がつながっている国で生活してみたい。出来れば国籍も韓国に変えたい！」

「Y：国際結婚についてどう思うのか？」

「B：韓国人と出会いがあれば結婚したい。憧れの国の人と結婚するのは素敵だと思う。周りの親戚も日韓

国際結婚をしている人が多く、祖母の姉妹である妹5人も日韓国際結婚をされている。こういう影響もあり国際結婚に対するプラスイメージが強く、国際結婚したいという願望がある。』

「Y：もし国際結婚をしたら子供の教育はどうしたいのか？」

「B：まずは、自分は韓国語があんまりできないので、私は日本文化と日本語を教え、夫には韓国語を教えてもらいたい。また、共通語である英語は必ず教えたい。』

「Y：もし、自分と同じ立場にいる日韓国際結婚家庭の子供達がいたらどう関わりたいのか？」

「B：まず、日韓国際結婚している家庭の子供達の集まりや支援するセンター等があれば利用したい。国際結婚は大変だけどお互いに共通点がありコミュニケーションの出来る場所があれば互いに助け合うことが出来そう。また、諸々の情報を得たい。文化と言語が飛び交う環境であることなので、出来ればお互いに助け合い、勉強し合う場所がほしい。また、自分で出来ることがあれば協力したい。自分達の才能を活かし日韓国際結婚家庭の子供を支援する。』

考察：Bの周りに日韓国際結婚している親戚が多く、Bに肯定的なイメージをもたらししていることもあることで国際結婚に対するイメージはプラスイメージを持っている。こういう成長背景もあり、Bは出会いがあれば国際結婚を考えている。また、日韓国際結婚家庭の子供のコミュニティーやセンター等を利用することにより、国際児²⁾の子供のアイデンティティ形成に同じ仲間がいることで、居場所作りにも提供できると話している。

「事例Bのインタビューのまとめ」

Bは日本生まれで、幼い時から祖母の影響で常に韓国の文化に触れていた。周りの親戚（いとこの家族）も父親が韓国人であり、韓国・韓国人には常に接触があった。年に2回定期的に韓国を訪れ韓国の文化に触れていた。しかし、家では韓国語を使う機会もなく、教えてもらってもないが、韓国の文化には幼い時からずっと触れていて、Bの内面は韓国人であるといえる。大学生になり韓国のルーツ持つことで、韓国語を学ぶことにつながった。韓国語を学ぶことにより祖母の国の韓国に近づいているようで嬉しいと同時に韓流ブームになり韓国の言葉を学ぶことにより誇りを思っている。

Bの周りに日韓国際結婚している親戚が多く、Bに肯定的なイメージをもたらししていることもあることで国際結婚に対するイメージはプラスイメージを持っている。こういう成長背景もあり、Bは出会いがあれば国際結婚を考えている。Bが韓国にルーツを持つ在日3世であることで自分のアイデンティティ形成には韓国との深い関わりがあるということを知ることができる。

IV. HTP 検査から見えるアイデンティティ

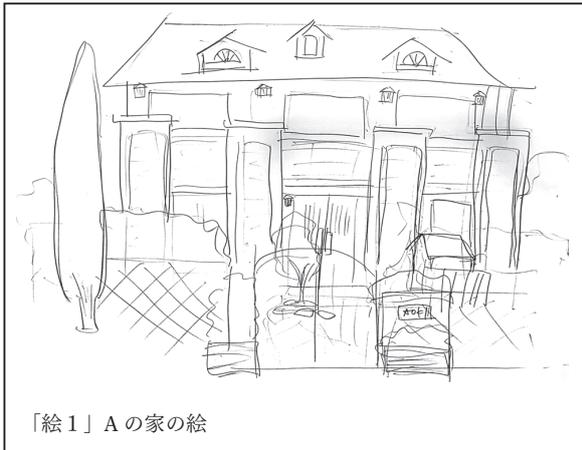
HTP (house, Tree, Person) とは、アメリカの Buck, J.K. (バック1998) が考案した。3枚の画用紙にそれぞれ「家・木・人」の絵を描くことで、クライアントの人格や心的状態を把握する描画テストである。HTP テストからわかることは、クライアントの感受性・成熟度・柔軟性・効率性・パーソナリティの統合度・パーソナリティと環境との相互作用などを把握するのに有効である。特に、家の絵は「家族との関係性と家族の捉え方」、木の絵は「葛藤や抑圧された感情といった個人のかかえる問題」、人の絵は「対人関係の持ち方や防衛の仕方」が投影されやすいと考えられている。在日3世である二人のアイデンティティ形成に言葉以外に見えてくるものを察するために自由な表現が出来るように HTP 検査で試みた。

徐明淑 (2013) では九分割合絵画による青年期在日韓国・朝鮮人のアイデンティティ形成に関する研究

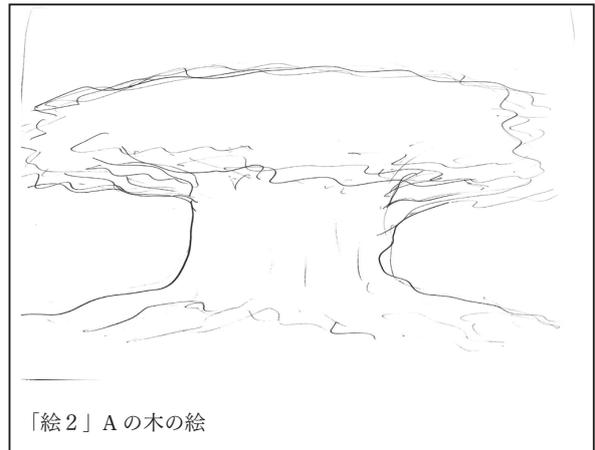
²⁾ 国際児 (international children) は、「二つ以上の国や文化にまたがって成長する子供」という広義の国際児を指す。その際、「国籍と民族が異なる男女の間に生まれた子供」という狭義の「国際児」はもちろん、在日外国人同士の子供、海外に在住する日本人の子供、帰国子女なども含む (鈴木一代 2004, pp42-53, 2008, p37)。

では「在日」若者は、日本学校出身者・朝鮮学校出身者ともに、日本社会の中で自分探しに悩む傾向にあることと民族語を含む民族文化は「在日」若者のアイデンティティ形成に影響を及ぼしていることであると述べている。箕口ら（1996）は、中国帰国者の子供たちの適応家庭をS-HTP法を導入して縦断的に調査をした。描画的表現記技法が、移住動機の希薄な児童期の子供たちが、異なる文化圏の移住にともなって自己の同一性をどのように形成し達成して行くのかを把握している。きわめて有用な方法で、ホスト側に、援助的かわりに重要な示唆を提供していると述べている。しかし、本研究では韓国にルーツを持つ在日3世のアイデンティティ形成に関することで研究対象者の文化的なアイデンティティ形成には「在日」、「国際児」と異なるアイデンティティ形成が見られると考える。

まず、AのHTPの絵を見て考察して行きたい。



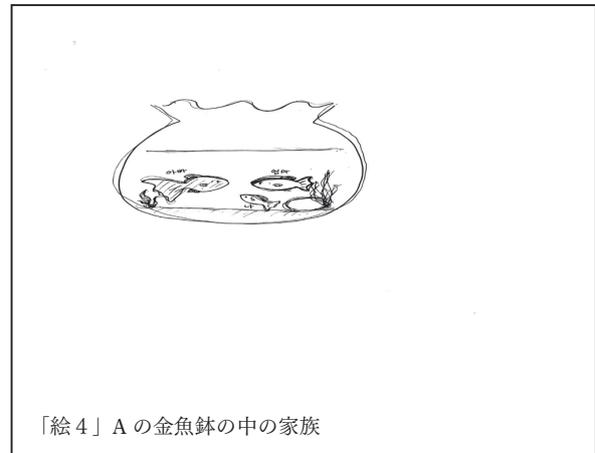
「絵1」Aの家の絵



「絵2」Aの木の絵



「絵3」Aの人の絵



「絵4」Aの金魚鉢の中の家族



「絵5」Aの雨を避ける自分

まず、「絵1」はAの実家の家を描いていたという。3階建てで、窓にはカーテンは外が全部見えるようにオープンにしている。玄関に通り道も置かれている。門は家の中が見える鉄の門である家の中に桜の木が植えてある。家の脇にも木が植えてある。この絵からもわかるように窓にカーテンが遮らずAの家族関係と社会関係を察することができる。家族との円満さと幼い時から多国籍の人との関わりもあり人との社交性がありフレンドリーな性格で誰にでも仲良く出来るAの性格が表されている。

「絵2」は、何百年も経つ木であり、いろんな人が来て休んだり木陰で遊んだりする光景を描いている。鳥達も集まっている。この木の特徴は木の柱が太く、枝や葉っぱ全体が上を向いていることである。枝の葉っぱが波の模様であることで活発で活動的で社交的なAの性格を反映しているといえる。

「絵3」は、21歳の自分を描いたものである。A4紙の中央に自分をしっかりと描いている。落ち着いて、堂々としている様子を描いている。現実主義のAの今の21歳を上手く表現しているといえる。

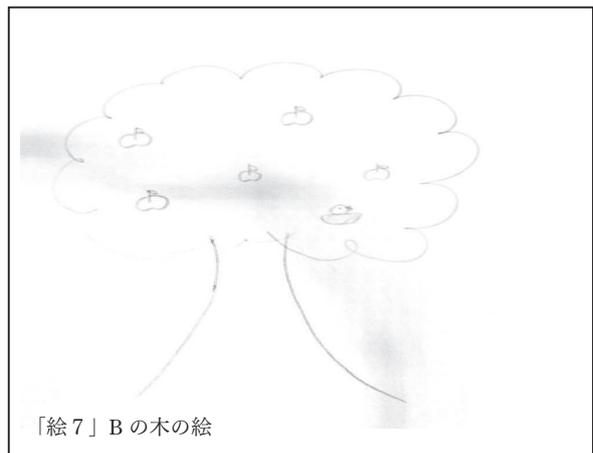
「絵4」は、金魚鉢の中の家族を表現したものである。色で表現すると黒色で大きい左側の魚が父親である。右側の赤色が母親を表現している。その下に子供魚が泳いでいる。韓国語で父親(아빠)、母親(엄마)、自分(나)と書いている。魚家族の位置関係を見て取れるように家族の間の関係と力関係も垣間見ることができる。

「絵5」は雨(苦難、試練)を避ける絵である。この絵の特徴は、人が前を向いているのではなく、雨が横から降り出しているその雨を傘一本で必死に避けようとしていることである。また、表情もリアルなもので、この雨をどうにか避けたいという気持ちでいっぱいである。Aは今まで英語、ピアノ、バイオリン等を学んできた。自分にとっては楽しいことでもあったが、周りの期待に応じないと行けないこともあった。芸大付属高校も受けて合格したものの周りに期待があんまりも多く一体自分がバイオリンをやる意味が見いだせなかったという。芸大付属高校には進学せず、地元の高校に通いながら大学受験をして歯学部(父親が歯医者でもあり家業を次ぐために)を志願したものの挫折を味わった。今の私立大学では最初はなれなくて大変だったけど、韓国語の授業を含めて国際関係の授業等もあり自分がやりたいことを見出して現在は充実した大学生活を過ごしている。

次は、Bの絵である。

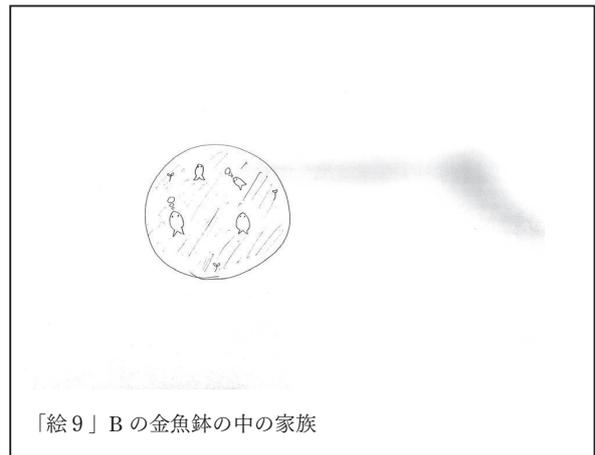
「絵6」は、レンガ作りで電気も暖色系の明るい家をイメージしている。3人で暮らす家である。普通の絵を描いているように見えるが、ポストを描いていることで何かを待っている。また、家のドアと窓は閉まっている。煙突が描かれていて、何かの葛藤があるようだが、本人はそれについては何も言っていない。普通、平凡な家でも言える。

「絵7」は、りんごが実った木である。木に果物が描かれているのは「現実主義者、ナルシスト、即興的な、せっかちな」意味を持つ(미술치료의 이해(美術治療の理解) p169)。特徴は小鳥が母鳥を待っていることである。鳥や鳥の巣を描くのは「センスがある、明るい性格」を表現している(미술치료의 이해





「絵8」Bの人の絵



「絵9」Bの金魚鉢の中の家族



「絵10」Bの雨を避ける自分

(美術治療の理解) p168)。Bに幼い時両親は共働きだったのかを聞いてみるとそうであったという。これは小さい時に母親を待っている自分を描いていたとも窺える。

「絵8」は、中学生(14歳)の自分である。制服でバスケットをしている絵で、笑顔で友達とバスケットをしている絵である。この時が一番幸せで楽しい時期であったとBは言っている。

「絵9」は、金魚鉢の中の魚家族を描いてもらった。3人家族なのに4人が描かれている。もう一匹の小さい小魚は誰なのかと聞いてみたらいとこ(父親が韓国人で在日2世の叔母の子供)であると言ってくれた。おそらく、自分が在日3世であることで、いとこと同じ境遇にあることで、家族にいられたとも言える。

「絵10」は雨(苦難、試練)を避ける絵である。レインコートとレインブーツ、レインコートについている帽子をかぶり、またその上にスポーツ帽子をかぶっている。表情は無表情である。絵が小さいのが特徴である。

自分の名前を表現してみる絵を描いてみたが、個人情報が入り込んでいるため、ここには記載しないことにする。

インタビューの終了後AとBに感想文を依頼した。

Aは「自分の家族についてはもちろん、自分自身のことを見つめ直すことができた。将来は国際関係の職に就きたいと考えているので、自分の持前の向上心で語学力を磨き、フレンドリーな性格を活かして、もっといろんな人と交流し、様々なものの見方や考え方を吸収して自分の世界を広げていきたいと思っている」。

Bは「今回初めてこんなに多くの韓国と日本のことについて改めて考えさせられました。私が日常生活の中で自分が韓国のルーツを持っていると意識しなかったのは、幼少期から韓国の文化や環境に慣れてい

たからだと思いました。私は日本と韓国の昔からの関係や歴史には詳しくないけれど、これからは仲の良い国同士になればと思います。」

韓国にルーツを持つ子でありながら今まで自分のことを詳細にお話したことはないと言っている。特に、Aの場合19歳になってから韓国のルーツを持つ在日3世であることを知らされていたため周りにお話しする機会もなかったことだと考えられる。Bは幼少期から二つの文化が飛び交う環境で育てられ二つの文化が存在するのが極当たり前と思っていたが、こういうインタビューを通して改めて自分のルーツである韓国人在日3世である自分のアイデンティティを見つめ直したとも言える。二人の感想からも垣間見えるがインタビューとHTP検査を通して自分のアイデンティティを確認したことと言っても過言ではない。

V. 結論

Aは日本生まれで日本国籍。祖母(母方)が韓国人で、自分が韓国にルーツを持つ子供であることを19歳に知らされる。祖母が韓国人であることで、19歳以前までは韓国・韓国人との関わりもなかったけれど、本人はもっと早く教えてもらいたかったようだ。ずっと日本人だと思い込み、韓国についてもさほど関心がなかった。しかし、高校生の日韓交流会がきっかけで韓国人の友達とK-POPを通して仲良くなり、SNSで情報交換するうちに少し韓国に興味を持つようになる。19歳以降祖母が韓国人であることで祖母と韓国語でコミュニケーションをしたい、祖母ともっといろいろなお話しがしたかったということからわかるように、自分のルーツである韓国・韓国人であることをもっと知るために努力している。19歳以降から自分は国籍と外面上は日本・日本人であるけれど、内面は韓国人であると認識し始める。大学生になり、大学の夏短期プログラムで2週間韓国の文化に触れたり、大学で韓国語を受講したり、K-POPや韓国ドラマ鑑賞、元彼氏が韓国人であったり、週一回韓国を訪問したりなど、すべてが韓国のルーツと関係があり、文化的アイデンティティを探るプロセスにあたる。

Bは日本生まれで、幼い時から祖母の影響で常に韓国の文化に触れていた。周りの親戚(いとこの家族)も父親が韓国人であり、韓国・韓国人には常に接触があった。金魚鉢の魚家族にいとこを入れることにより自分も同じく韓国にルーツを持ついとこを仲間、すなわち家族に入れたのが特徴である。年に2回定期的に韓国を訪れ韓国の文化に触れていた。しかし、家では韓国語を使う機会もなく、教えてもらってもないが、韓国の文化には幼い時からずっと触れていて、Bの内面は韓国人であるといえる。大学生になり韓国のルーツを持つことで、韓国語を学ぶことにつながった。韓国語を学ぶことにより祖母の国の韓国に近づいているようで嬉しいと同時に韓流ブームになり韓国の言葉を学ぶことにより誇りを思っている。Bの周りに日韓国際結婚している親戚(祖母方の妹、いとこ)が多く、Bに肯定的なイメージをもたらしていることもあることで国際結婚に対するイメージはプラスイメージを持っている。こういう成長背景もあり、Bは出会いがあれば国際結婚を考えているが、Bのアイデンティティ形成に相当の影響をもたらした祖母の存在といとこの存在はBが将来に日韓国際結婚を考えるきっかけにもつながっている。

本研究では二人の在日韓国人3世のアイデンティティ形成に関わる項目をインタビューした。インタビューには見られなかったことをHTPと金魚鉢の家族、雨を避ける私の絵を描いてもらい言葉では言い表せなかった部分を察するために絵の調査を行った。結果的にHTP検査とその他の絵の検査ではインタビュー内容を裏つけてくれたことになる。このような、事例研究にHTP検査を行い韓国にルーツを持つ在日3世のアイデンティティ形成に関する研究は珍しいものである。今後はこのような事例研究を土台に縦断研究も共に行う予定である。

参考文献

李正姫・田中共子(2010)「在日コリアン二世・三世の二文化環境への態度をメンタルヘルス(1) —文化的アイデンティ

- ティの自己認識に関する面接調査—『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第30号
 内山絵理華 (2017) 「日系2世のアイデンティティ形成における言語の影響と役割—継承語教育の観点から子どもの心を解く」 京都大学論集, pp.98-141
- 大西晶子 (2001) 「異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー—文化的アイデンティティ研究を中心に」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻 pp.301-310
- 河原俊昭 (2009) 「国際結婚多言語化する家族とアイデンティティ」 明石書店
- 鈴木一代 (2004) 「国際児の文化的アイデンティティ形成をめぐる研究の課題」 『埼玉学園大学紀要 人間学部編』第4号 pp.15-24
- (2005) 「日系国際児の文化的アイデンティティ形成—事例の検討—」 『埼玉学園大学紀要 人間学部編』第5号 pp.85-98
- (2008) 「海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成」、ブレーン出版、p.37
- 徐明淑 (2012) 「青年期在日韓国・朝鮮人のアイデンティティに関する研究—事故イメージと言語の側面から—」 広島市立大学大学院 博士学位論文
- 趙衛国 (2007) 「中国人高校生の異文化適応家庭—文化的アイデンティティ形成の要因に注目して—」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻 pp.337-345
- 曹慶鍋 (2012b) 「アイデンティティの形成と『本国』イメージの問題」 宮島喬・杉原名穂子・本田量久編『公平な社会とは—教育、ジェンダー、エスニシティの視点から』人文書院
- (2013) 「在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様性に関する調査研究—日本学校在学生と朝鮮学校在学生の比較を中心に—」 多言語多文化—実践と研究 (5)
- 鄭 喜恵他 (2006) 「在日韓国人の言語使用とアイデンティティ」 多文化関係学3、多文化関係学会 pp.141-149
- 中島和子 (2001) 『バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること』アルク
- 丸井ふみ子 (2012) 「アイデンティティ研究の動向—異文化接触・言語との関係を中心に—」 東京外国語大学大学院 言語地域文化研究18、pp.193-209
- 三沢直子 (2014) 「S-HTP に現れた発達の停滞」 誠信書房
- 箕口雅博・斎藤雅彦 (1996) 「HTP 描画法からみた適応過程」 江畑敬介・曾文星・箕口雅博 (編) 『移住と適応—中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究—』日本評論社、pp.301-322
- メアリー・アンジェリン・ダアノイ (Mary Angeline Da-anoy) 多元的主体としてのフィリピン・ジャパニーズにおけるアイデンティティの具体化—多分的ルーツの日常的明瞭化、『国際結婚と多文化共生』明石書店、pp.143-166
- やまだようこ (2006) 「質的心理学とナラティブ研究の基礎概念：ナラティブ・ターンと物語的自己」 『心理学評論』49, 436-463
- 李原翔 (2017) 「日中国際結婚家庭の子どもたち」—言語習得、文化継承とアイデンティティ形成の課題、佐竹眞明・金愛慶 編著『国際結婚と多文化共生』明石書店、pp.119-141
- 김민지 (2015), [다문화가정 자녀의 문화적 정체성 형성 과정에 관한 연구], 디아스포라연구 제9권 제2호 (제18집) pp.197-230
- 김자영 (2017), [나는 누구인가?: 한 다문화가정 소년의 자아정체성에 관한 사례 연구], 다문화교육연구 (10) 2., pp.125-145
- 김정열외 (2014), [다문화가족의 상담과 실제], 공동체
- 이민경 (2016), [국제결혼가정 자녀들의 정체성 재구성], 교육사회학연구 제26호 1호, pp.101-120
- 이민경·김경근 (2009), [이주노동자가정 청소년들의 적응전략], 교육사회학연구 제19호 2호, pp.107-132
- 정여주 (2014), [미술치료의 이해 - 이론과 실제], 학지사.
- 윤인진·김은비 (2012), [다문화가족의 언어 사용과 아동의 사회정체성] 이중언어학 제48호 pp.273-307